
～ 楽譜 ～ 私の異世界探検ライフ

黒椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「楽譜」私の異世界探検ライフ

【Nコード】

N5407X

【作者名】

黒椿

【あらすじ】

大雑把な主人公と、やる気のない精霊とが繰り広げるほのぼの（！？）ファンタジー。魔法につられた主人公が精霊界を救うべく、精霊と《楽譜》を集めてまわります。そのなかで起こる様々な出来事を突破し、主人公を待ち受けているものは…。

作品の中で疑問に思った事はどんどん聞いてくださいね

作中で疑問にお答えいたします！（・ω・）キリ

答えられる範囲ですが（・ω・）

感想・ご意見お待ちしております！

こんなお話も読んでみたい！などの意見もお待ちしております！

その場合、本編にどうかしてねじ込むか番外編でお届けいたします！

登場人物紹介

麗舞 れいぶ 桜花 おうか

性格 大雑把

性別 女

所見 小さい頃に母親を亡くし 一人暮らし。

中学二年生 成績は何だかんだ言っただけの上

死ぬほどを食事を愛している。（食事を邪魔されるとキレます）

現実的で、常に損得勘定が働く。そのわりに意外と魔法とかを夢みていたりする。

ソフィア・アイメーレジー

性別 女

性格 天然なのか、それとも考え深いのか分からない。

所見 目上の人には猫をかぶり絶対に危険なことがない限り自分から動かない。

穏やかにも見えるが、案外強行突破したりする変わり者。

マリア・レイストクレアティ（レイクトクレアティ国の女王様）

性別 女

所見 時々たま出てくる精霊界でもっとも偉い方。

優しいけど変わったものが好きで真面目。

第1話

……ここ、どこなんだろう

私は、全く見覚えの無い場所に座っていた

えーと、何がどうなってこうなったのか、思いかえしてみよう

たしか、学校から帰ってて、友達がなんか急に怒りだした原因を考えて、出てこないから、両手を組んでうなつてたんだ！！

そつだそつだで、なんか足元に地面の感覚なくなつたなと思つた瞬間落ちたんだ！

で、目を開いたらここにいたと、だからか、なんかお尻痛いなと思つたら落ちた時に尻餅ついたんだな…

だれだよ！あんなところに落とし穴掘つたのは！！

おかげでこっちは尻餅ついたんだぞ！！！！

まあ、いもしない相手に怒つてもしかたないか…

にしても、見渡す限り森、森、森だな

つっても私の周りは草原だけどそつ、私の周りだ・け！

私がいるところだけ草ばーばー

だれだよ、掃除さぼったの！

それともなに？新手の嫌がらせ？

「この森、燃やしてしまおうかしら…」

私はいい加減切れて、ものすごく物騒な事を言い出した

第2話

すると、突如上から声がした

『あ、すいません急に上から私は精霊のソフィアと申します。ってこんな事言ってる場合じゃない森を燃やすなんて止めてくださいよ
おおお!』

は？、こいつ何言ってるの？私は思ったが口には出さなかった。

「ああ、あの事、あんた何言ってるの？あんなの嘘に決まってるじゃない」

こいつ本物のバカか天然かどっちなんだ

『なんて物騒な嘘を・・・もうそんな事言わないでくださいよ』

こいつ、ウザい。さすがに口には出さないが、いや出しそうになったがな

「はいはい、もう言いませんよぉ」

適当に答えといた。

『はいは一回です!-!』

マジウザい、こいつ母親かなんかか？もちろん、口には出さない。出しそうになったけど……ぐっジョブ！私、忍耐の子!-!

「はい、わかりました!-!これでいいでしょ?」

「うーん、まあ良いですよ」

「そっぴやあんだ誰？何者？」

『私はあなたの世界の言葉で言うといわば精霊・妖精の類いです私の名前はソフィア・アイメーレジーです。ソフィアとお呼びください』

「私は麗舞 桜花、桜花でいいよ」

『よろしくお願いします。桜花さん』

「急だけど、ソフィアは髪と瞳は赤だけど、全体的に緑だから木の妖精とかだったりするの？」

『あ、いえ、私は炎の属ですんで炎の妖精です。』

私は内心

（炎属性な癖に燃やすとか言うのか…）
と思いつつも

「え！？炎！？服とか靴緑なのに！？」

と、驚いてみたりした。

『はい、私赤より緑の方が好きなんで緑にしてるだけなんですよ。髪と瞳は親族に全体に変えると言われてるので、どうする事もできません…』

ソフィアは肩をすくめてそう言った

「全部を属性に合わせなくていいの？」

『はい、水の妖精が赤い服着たり、髪にしたり瞳にしたり、雷の妖精が黄色い服着たり髪にしたり瞳にしたり、みんな思い思い好きなようにしてますよ。』

「思っていたより妖精って軽!!」

私達（おもに私が）はそこで自分達の事について話していた。するとソフィアが急に思い出したかのように私に向かって喋り出した

『突然ですが、桜花さんにお願ひがあるのですが、良かったら聞いてくださいますか!？』

「いいよ」

私は気軽にそう発言した事を後々後悔したり喜んだりすることになるのです。

第3話

「で、何？その頼みって」

『じつは、私達の世界には伝説の楽譜という物が在るんです。しかし、その楽譜は今、3つの世界に散らばってるっていうか、預ける状態なんです。今私達の世界は地盤が崩れ、壊れかけています。しかも悪魔もそれをいい事にこの世界を乗っ取ろうとしているのです。それを直す事が出来るのが、伝説の楽譜なんです。伝説の楽譜があればこの世界は治るし悪魔もきつと諦めてくれるはずです。だから伝説の楽譜探し手伝ってください！』

自分からいって言うつといて悪いが面倒くさそうなので、断らせていただこう。

「ごめんなさい、自分から言うつといてなんですが、面倒くさそうなので、断らせていただきます。」

『そんなっ！』

「てゆうかさ、預けてるんなら返してもらえばいいじゃない。」

『私達みたいなただの妖精や精霊が行っても相手にしてもらえません』

「じゃあ、女王様が行けばいいじゃん」

『女王様は今、忙しくて城を動く訳にはいきません。それに楽譜の力に狂わされてしまった人もいます。そんな所に女王様をお連れす

るなんて…」

（じゃあ、私なら別にいいのかよ）

「それにさ、仮に私がそれを手伝ったとして、私に何の利益があるの？」

『そんなつお願いです！手伝ってください！！』

「ねえ、私の話聞いてる？だから、仮に私が手伝ったとして、私になんの利益があるの？って聞いているの！それに、私じゃなくても他の人でいいじゃない。」

『それは、普通、この世界に人間は入れないようになっています。しかし、あなたは入ってきた。それは、あなたにはなにか特別な力があるという事なのです。それに、この世界にある言い伝えがあるのです。』

（入ってきたというより落ちたの方が正しいけどね。けど、言い伝えの内容が気になるから聞いてみよう！）

「言い伝え？」

『はい、それは、

この世界が壊れかけた時、救いの女神がこの地を救いに異世界から舞い降りるだろう。

という言い伝えがあるのです。』

「救いの、女神…」

『きっとあなたがそうなのです。現に、何千年も前に救いの女神が現れ、世界を救ってくれました。まあ、あなたの世界と私達の世界じゃ時間の流れが大きく違うのですがね。』

「私にも出来るのかな？」

『きっと、あなたになれば出来ます。いいえまああなたにしか出来ないのです。』

それに、魔法使いになれますよ？』

魔法使い・・・

「えっ、本当！？じゃなくて、ゴホンッ

ま、まあ？そんなに私が必要なら手伝ってあげなくもないけど？」

私は内心、魔法使いという言葉に心の奥底からウキウキしていた。

『ありがとうございます！！恩にきます！！このご恩、一生忘れません！！！！』

「そんな大げさな・・・」

私はそんな大げさな・・・と言ったがそれがどれだけこの世界にとってありがたいことなのか知るよしもなかった。

―SIDEソフィア―

私はいまさつき女王様から呼び出された。

女王様もこのいそがしい時にどうしたんだろう。

この世界は最近、壊れかけている。

この世界の地盤にヒビが入り、それだけでも大変だというのに、そのヒビから悪魔がこの世界に入りこんできた。

この世界は大きく分けて2つ、1つは、私達が住んでいる精霊界、もう1つは悪魔達が住んでいる悪魔界、決して交わる事の無い世界が交ってしまった。

しかも、悪魔が所々で問題を起こしているのだ。

しかし、いくら大変だとはいえ、侍女の私が呼び出されるとは、この世界も末期だな。

とか思いながら歩いていると王の間についた。私はコンコンコンッと軽く扉を3回ノックしたあと、

『ソフィアです。』

と言う。すると中から

『どーぞー』

と優しい感じな声がした。

扉をあける

この部屋の一番奥にある玉座に座っているその人がこの国、レイストクレアティ国の頂点に立つ御方だ。

『おまたせいたしました。マリア様私になにようで御座いますか？』

『この国が壊れかけていることは知っていますね。』

『はい。』

『ついに現れたのです。』

『現れた、とは？』

『救いの女神が、この国の救世主がです！！！！』

女王様が目を輝かせて言う。

『それは、本当でございますか！？』

『はい、今さっき森に現れたようです』

『しかし、何故それを私に？』

『あなたに行って貰いたいのです。楽譜集めに。あなたにはそれなりの力があるし、きっとやり遂げてくれると信じています。』

『…私で、宜しいのですか？』

『あなたにしか出来ないのです。
お願いできますか？』

『はい！』

『あ、それと、その子に会ったら、私の所に連れてきてくださいね
会ってみたいんで。』

『かしこまりました、行つて参ります！！』

『怪我のないようにね。』

私は礼をし、その部屋から出て行つた。

『とりあえず、当分の間猫かぶるか…』

私は小さい声でそう呟いた。

とりあえず、森に行くかな。

救いの女神様に会いに。

『よし、転送』

森に着いた瞬間、声が聞こえた。

「この森、燃やしてしまおうかしら…」

『あ、すみません急に上から、私は精霊のソフィアと申します。ってこんな事言ってる場合じゃない森を燃やすなんて止めてくださいよおお！！』

これが私達の出会い方。

第4話

『それじゃ、行きますか。』

「え、どこ」

私が言いかけたその瞬間、私は宙にうき、周りの景色は変わっていた。

どさっ

「痛った、ってここどこ!？」

気が付けばそこは森ではなく、とても豪華な場所だった。

目の前にはまばゆいばかりの光を放つ金色の髪を上の方で緩く結い上げ、サファイアのような綺麗な色の瞳に、青色と銀色を使った服を着た女の人がいた。

『ここは王室でございます。こちらに居られる方は、この国の頂点に立つおかた、女王陛下様であられます。』

「えっ、女王様!？は、初めまして!地球の日本という所から来た、麗舞 桜花と言います。宜しく願います!！」

『あなたが桜花ですね!？会うのを心から楽しみにしてました!!私の名前はマリア・レイストクレアティです!マリアって呼んでください!』

(女王様明るっ、でも超美人、めっちゃ綺麗)

「あ、えと、宜しくお願いします！マリア様！！」

マリア様はキヤーキヤーとはしゃいでいるのでスルーしていいよね？

「そうだ、ソフィア今さっきのなんなの？」

『ああ、あれは瞬間移動ですよ。』

「ふ〜ん……って、瞬間移動！？今瞬間移動って言ったよね、マジ！？」

あまりにもさらっと言うもんだからそのままスルーする所だった：

『はい、本当でございますよ。お疑いになるのならご自分の頬をつねってごらんなさい。』

『

ぎゅっ

「痛い！本当なんだ！夢じゃないんだ！すっごーい！！」

私はとにかくはしゃいだ。魔法は昔から私の憧れなのだ。

「私にも出来る！？」

『はい、出来ますよ。瞬間移動は修業があるので出来ませんが、他の魔法なら契約をしたらできますよ。』

「そんだけ！？じゃあやろ！今すぐやろ！！」

『それでは、こちらの紙にご自分のお名前をお書きください』

かきかき

『書きましたね？では、女王様！』

何が起るのだろう

…少し不安だなー

『では、私の力を少しですが、あなたに分け与えましょう。』

目の前に黄色い光を放つ球体型の物が現れた。

『さあ、受け取りなさい』

私がそつと触れるとそれは黄色の光を放った。あまりにもすごい光のため、私は目をつぶってしまった。

そつと目を開けるとその球体は消えていた。

「あれ？あの球体型は？それよりなんか、体にすごい力が宿った気がする！」

あくまでも？感じ”だが。

『これであなたも魔法が使えますよ』

「えっ本当！？これで念願の魔法使いだー！！！！子供の頃からの夢だったんだよねー！！」

「ねえ、マリア様、そういえば魔力？を渡すの少しって言うだけ
どなんで？」

『私はこの国の唯一の支え、全ての力をかす訳にはいけないのです
よ、ごめんなさいね。』

「ま、そうだよ、普通、少しでも力を分けてもらった事を感謝し
なくっちゃ」

『分かって頂けましたか？にしても、とても嬉しそうですね、では
！これから私と一緒に楽譜集めがんばりましょう！』

「まあ、力も貰っちゃったし、頑張るしかないか、これからよろし
くね！ソフィア…あああ！？」

瞬間、私の体は宙に消え瞬く間に景色は別の物と化していた。

『一刻の猶予も惜しいのです！さあ、こちらへ！-！』

私、本当に頑張れるだろうか……

二人の旅はまだ始まったばかり、これからまだまだ続きます。

頑張れ！桜花、ソフィア！

第5話

そこは見渡す限りの海だった。

いや、光が屈折して見えるから 恐らく海の中だ息が出来るということ

自分は魔法を使えている証拠だろうか…

まあ、魔法使えてなかったら私、今頃溺れてるんだろうけどね…

私、泳げないから…

私の頭にふと疑問がよぎった。

「そうだ、ねえ、伝説の楽譜ってのは何処にあるの？」

『そうですね、多分、竜宮城ですかね』

「そっか、竜宮城か… って竜宮城！？マジで！？あるの！？竜宮城！！」

『はい、ありますよ。』

「でもさ、もし帰る時に玉手箱渡されてお婆ちゃんになったらどうしよう！！」

私の中では竜宮城＝玉手箱＝じいさん（ばあさん）になっている。

『いや、私達が貰うのは楽譜ですし、それに、玉手箱貰ったら開けなければいいだけじゃないですか』

「そっか、そういやそうだな、じゃあ、いつか早く楽譜探しに行こう」

『マイペースですね…まあいいです、そうですね、それじゃめざすは竜宮城です!!』

こうして私達の旅は始まった

第6話

ほのかに感じる冷たい水に包まれながら、どこまでも続く広い海のなかを泳いでいた…

いや、新幹線のように猛スピードで進んでいた。

にも関わらず竜宮城にはなかなか着かない。

まあ、私が寄り道してるからなんだけどね…

『桜花さん、いい加減ちゃんと進んでくださいよ〜』

「え〜、いいじゃん、私泳げないからこんな水の中に入ることないんだから。」

深海には見たこともない魚がいっぱいいた。
色とりどりの魚がそこらじゅうにいっぱい！

『え！？桜花さんって泳げないんですか！？』

「そうだよっなんか悪い！？みんなに言われるよ！！」

『いえ、悪くは無いんですが、桜花さんって運動神経良さそうないメージがあつたんで』

「あ、でも水泳以外のスポーツとかは全部クラスで1番だよ」

『やっぱりあなたってすごいですね…』

「そうかな？」

『すごいですよ！水泳以外ねスポーツ全て1番とか！！』

「そういうソフィアはどうなの？運動」

『……………あつ、あの魚綺麗ですよ』

「ごまかしたっ」

『いいじゃないですか、別に…』

「まあ、人（妖精？）にも得意不得意があるもんね！」

『そうです！皆それぞれ得意不得意があるんです！！』

「水泳が出来なくて何が悪い！！」

『運動がいまいち出来なくて何が悪い！！』

「そうだそうだ！！」

「『……………あははっ』」

私達は2人で少し笑いあった。

「それにしても、ここって、楽しい！！」

『はあ、しょうがないですね、少しだけですよ』

「はあゝい」

そして私はそこで魚を眺めていた。

『もぉー！、いい加減にしてくださいー！！』

「うわー！！なに！？急に、びっくりしたー」

『いつまで待たせる気ですか！いい加減行きますよー！！』

「え！？もうそんなにたった？」

『はい、もうかれこれ数時間も』

「ごめんごめん、それじゃ行こうか」

『やっと出発ですか…』

「あはは…」

そして私達は水の中を進んでいった。

そして、微かにぼやける視界に眩しい光を放つ物が見えた。近づくにつれはつきり見えるその存在。

竜宮城がその姿を現した。

「竜宮城ってあれ！？」

『はい！あれです、気を引き締めてくださいよこの先、なにがある

かわかりませから』

「分かった、その楽譜を守る人？を倒して楽譜をゲットするんでしょ？」

確かそんな感じに説明された気がする。

『確かにその通りですけど、倒すと同時に相手の心を救わなければいけません』

「相手の、心？心をどうやって救うの？」

『戦う前に相手の心を自分が救うんだという事を証明するセリフを言わなければなりませんその言葉はご自分で考えください。』

「相手の心を自分が救うんだという事を証明する言葉、分かった考えとく」『お願いしますよでない」と相手は死ぬ事になりますよ』

「相手の命までかかっているのか、ならとことん頑張らなくちゃな、さすがに命はな」

相手が死ぬところなんて

喜んでみるほど私は鬼畜じゃない まっぴら御免だ。面倒だが致し方ない

『本当にお願ひしますよ』

「もっ、分かったって」

『本当に分かったんですか…？』

「大丈夫だつて」

（私ってそんなに信用ないかなー）

『はあ、とにかく、本っ当に頑張ってくださいよ。
さあ、そろそろ竜宮城に入りますよ』

こうして私達は竜宮城に踏み込んだ。

いや、踏み込もうとしたが扉が重すぎて開かなかった。

「もー、どうやって入るんだよ」

『なにやってるんですか？桜花さん、せっかく私が開けようとしてるのに』

「は？どうやって？」

『無論。』

《ガキヤゴキヤダーン！！！！》

『強硬突破ですが』

「ソフィアって運動苦手なんじゃ…」

『破壊系魔法の類いは大の得意ですよ。まあ、今さっきのは肉体強化の方が正しいかもしれませんがね。』

『ちなみに、破壊系魔法はクラスで1番です。』

ウフフッ、そう微笑みながらソフィアはそう言いになった。

「お見それ致しました。」

魔法ばんざい、私は心からそう思った。

そうしてやっとのこったで竜宮城の中に入れた。
プラスソフィアの以外な一面発見。

第7話

「にしても、何！？この無駄な広さに無駄なきらびやかさ！！」

『まあまあ、落ち着いてください』

「この建物の中に一軒家がいくつ入るの！？竜宮城だから周りにやたらと魚の肖像画とかあるし、こんなのに金使う位ならもっとましな事に使えー！！」

『本つつ当に落ち着いてください、周りの視線が痛いです。』

はつとして周りを見渡した、周りの人（魚？）が痛い人を見るような目で見ていた

『でも、仕方ないじゃないですかここには乙姫様が住んでいて、それに、乙姫様の召使いも住んでいて、さらに一般の方もいるんですから、ちなみにこの屋敷の面積は1000000...』

「言うなあああああ！！気が遠くなる！！燃やしてやろうか！」

『いや、無理ですよ。だってここは海の中ですし...』

「んだがああああ！」

「もういい！！それより早く楽譜見つけに行こう！」

『そうですね、そうしましょうか、とりあえず、奥に進んでみます

か？
』

『そうだね、そうしようか、よし、レッツゴー！』

私達とはかくそのほかでかい屋敷を走りまわった。

バン！

「ここかあゝゝ！！！」

ヒューウ

そこはただの物置部屋だった

「物置部屋かよ！」

『みたいですね』

「よし、次！次行こー！！」

ゝ数十分後ゝ

「はあはあ見つからねえよ！」

『おかしいですね、もうそろそろ見つかるはずなんですけど…』

「とりあえず、もう少し頑張ってください」

「うゝ」

『でも、桜花さんが歩かずに走って探すって言ったんですしょ？自業自得です！』

「うう」

正論を言われ私は全く反論が出来なかった。

私はぶつぶつと文句を言いながら歩いた。

ドーン！

歩いていると、目の前にほかの部屋とは比べ物にはならないくらい豪華で大きい扉があった

「もしかして、ここ？なんかでかいしきれいだし…」

『多分、ここなんでしょうね…』

「もし物置部屋とかだったら私、マジでキレるよ？」

『大丈夫です。もしそうだったら私もキレます。』

ギー

私達はそのずっしりと重たい扉を開けた。

その先には狂ったように笑う綺麗な人（人魚？）がいた

「こんにちは？」

《あら、あなた達誰？見たことの無い顔だけど》

目の前には青い髪に青い瞳を持っていて、青と水色のフリルとレースをふんだんに使ったドレスを着た綺麗な人（人魚？）がいた。

「もしかして、あなたが乙姫様ですか？」

第8話（前書き）

とても短いです。

第8話

《ええ、そうだけど、何か御用かしら?》

『やつぱりこの人が番人です。覚悟は出来てますか?』

「うん、大丈夫」

《あなた達何をヒソヒソ話していらっしやるの?それに、あなた方は誰なの?》

「ああ、すいません、私は人間界から精霊界を救うべく楽譜を求めてここに来ました。貴方が持っている楽譜を私達にください。最終的には強行手段をとらせて貰うかも知れません。」

《あなた達、この楽譜の事を知っていらっしやるの?》

「はい、お願いします楽譜を私達にください。」

《ふーん、この楽譜をねえ、…やあよこの楽譜は私に力をくれるのそんな便利な物はい、どうぞって素直に渡す訳ないじゃない。》

「はあ、残念です。では、こちらも強行手段をとらせていただきます。」

大きく息を吸って私は叫んだ

「哀れな彼女に魂の救済を!」

第9話

「……………」

「ねえ、ソフィア？」

『はい、なんですか？まあ、頑張つてやつつけてくださいね！！あと、呪い解くの忘れずをお願いします！』

「いや……。えつと、ってかどうやって戦うん？」

『……。よくそんなこと知らずにあんな台詞強気で言えましたね…ある意味尊敬します…。まあ、とにかく、したい事をイメージしたらきつと出来ますよ』

「あ、そうなの意外と簡単そうだな。」

《オホホホホ 馬鹿ね！！そんなのでこの最強な私に勝てるのかしら？秒殺してあげ……》

乙姫が喋っているにも関わらず私は攻撃を仕掛けてみた。（笑）

「バーンアウト」

一瞬にして炎が人魚に襲いかかった

《ギャアアア！おニユーの服があー！！》

「よそ見してんなよ」

「けっこう簡単だぜ」

《もう最悪！この楽譜の 恐ろしさを味あわせてあげるわ！！》

「いいぜ。かかってきな」

『いいですよ！桜花さん！！頑張れ！』

「（うつぜええ…あんたも戦えつつに）」

『なんか言いましたかあ？』

ソフィアがととてもとても黒い笑みを浮かべていらっしやった。

「いえっ、何も言っておりません！！」

《キエエーイー！！》

ドシャツ！

私達が相手を見殺して喋っていたらいきなり大量の水が、いや氷が降ってきた。

「不意打ち！しかも無暗唱！？無いわあ！」

《あああああっ！！服の恨み、消えろ消えろ消えろっお！！》

「ただか服1枚でマジギレとかどんだだけだよ！！」

《あああああっ！私の新品のっおニユーの服があゝ！！》

「はあ、厄介極まりないわね」

無言で視線をぶつける二人。勝利の女神はどちらに微笑むのだろうか…

・。＊†＊。・。・。＊†＊。・。・。＊
†＊。・。・。＊†＊。・。・。＊

「はい！！どうも主人公の桜花だぜ〜い」

『同じくソフィアです。』

「『ここまで読んでくださってありがとうございます！！』」

「作者はもっともっと上手に書けるように頑張るので、暖かい目でみてくれるとうれしいぜ」

『これからも宜しくお願いしますね。』

『にしても、乙姫様との戦いどちらが勝つんでしょうね？』

「そんなの主人公である私が勝つに決まってるでしょ、主人公の特権よ、特権」

『分かりませんよ…作者は案外負けさせるかもしれないんですから、主人公だからって何でもかんでも勝ちとか、人生そんなに甘く無いですよ』

「夢落ちとか？」

『死んでるかも知れませんか（笑）』

「うわ、ないわあ。鬼畜ソフィアめ！」

『なんとも言え（黒い笑顔）』

「キャラ崩壊してるって！？やめてっ、いやっ、やめてください！
笑顔でナイフたくさん向けてくんの！！」

『一度お遊戯するか？』

お遊戯とかいてバトルと読むよ byソフィア

「ぎやあああつつ！！」

「とまあ、桜花とソフィアのお喋りはここまでにして、ここまで読んで下さった皆様、本当にありがとうございます！作者はこれからも精一杯頑張らせて頂きます！これからもよろしく願います！
！」 by 黒椿

第10話（前書き）

祝 10話！！

投稿遅れてすいません（＜|＞）

第10話

『ウォーターアロー!』

「痛っ!くそっ、かすった」

『ふふふ、楽譜のお陰で私の力は上がってるの』

「くそっ」

『あははっっ!!私の服を燃やした罰よ!!さあ、まだまだ行くわよ』

「ライトシールドッ」

カキンツカキンツ、カキンツ

『なんとか絶えたようね、けどその盾、いつまでもつかしら、ふふ』

「ソフィア!何かいい案無い!？」

『そうですね、あなたは近距離戦のほうに向いています!どうにかしてあの矢を撃ち落とせないでしょうか?』

「撃ち落とす!そうだ!アドバイスありがとう」

「ピストル」

私は銃を出した

『何？遠距離戦で戦うの？あたしに遠距離戦で挑もうだなんて、無謀もいいところだわ』

「誰が遠距離戦で戦うって言った？」

パリンッ

ついにシールドが壊れた

『シールドが壊れたんじゃ、あなたに勝ち目は無いわ！私の勝ちよ！！シールドを出そうとしたって無駄よあなたがシールドを作り出す前に私の矢があなたを貫くわ！！』

『とどめよ！ウォーターアロー！！』

「ふっ、シールドなんて今、私に必要無い！！」

『は？あなた何言ってるの？死を目の前にしてついに狂っちゃったかしら？』

私は銃で飛んでくる矢を撃ち落としながら確実に乙姫との距離を縮めていった

『なっ、そんな使い方するなんてっ、卑怯よ！』

「勝負に卑怯もくそもない！ソード！」

私は乙姫との距離がある程度縮まった所で剣を取り出した

『くっあなたがその気なら私だって!!』

そう言つて乙姫も剣を取り出した

カキンッ

カキンッ

ガッ

カキンッ

何度も剣と剣がぶつかる音がする

『わ、私が圧されてる? そんなバカな!!』

「やつぱりね、確かに遠距離戦じゃあぬたに負けるかもしれないけど、多分あまり剣を握った事のないだろうあんたになら!!」

『あなただつて剣を握った事などないでしょう!?!』

「いや、私は小さい頃からよく剣を握おもぢやつてたよ?」

『そんなっ』

ガキンッ

乙姫の剣が中をまう

「チエックメイトだあ!!」

『いやっ、いやあああああああつっ!!!!』

ズパンツ

「ふー」

ガシャ

私は剣を下ろす

『わ、私、生きてる？どう、して……？』

「私の仕事は楽譜の回収とあんたの呪いをとく事、あんたを殺す意味は無い」

『で、でもあなたの剣がズパンツって何かを切る音がしたわ』

「ああ、あれはあんたの周りになんか黒色の変な帯が見えたからそれを切ったんだ、多分あれがあんたを狂わせたんだと思う」

『そうなの？ありがとう』

「別に、私はやらなくちゃいけない事をやったまでだ　で、楽譜、貰える？」

《ええ、あなたにはいろいろと助けて貰ったしね　さあ、持って行きなさい》

『サンキュッ』

『1つ目の楽譜ゲットですね！』

「うん、じゃあ行くか、元気でな乙姫」

《あなたもどうか元気で、そうだこれを持って行ってください》

シャラ

「なんだこりゃ」

《これは、かつてこの海、いえこの世界の全ての海を支配したとされている竜王と言われる者の鱗です。きっとあなたを守ってくれるでしょう。ネックレス型になっているので首にかけといてください》

「ふーん、そうなんだまあありがと貰つとくよ、じゃあまた」

《ええ、いつかこの屋敷に来てくださいね》

「ああ、じゃあまたなー」

私達はその屋敷をあとにした

『はあ、疲れましたねえ』

「そうだね、…ってソフィア何にもしてないじゃん、観戦してただけじゃん」

『……そんな事より、楽譜が手に入って本っ当に良かったですねっ』

「話逸らすなよ」

「はあ、で、次は2日どこにあるの?」

『次は砂漠です』

「は?砂漠??」

『はい、砂漠です。』

「ええええええええええ!!!!」

『?どうかしたんですか?』

私は暑いのが大の苦手なのだ

「はあゝあ」

『?まあいつか、次目指すはピラミッドです!!さあ、行きますよ!!』

「うゝ」

・。＊†＊。・。・。＊†＊。・。・。＊
†＊。・。・。＊†＊。・。・。＊

「どうも!こんにちは!または今晩は!桜花です!」

『ソフィアです!』

『いやあゝ桜花さん、勝つちゃいましたね』

「あつたり前だろー主人公だからな！」

『負ければよかったのに（笑）』

「いやいやいやいや、主人公負けたらお話し終わっちゃうって」

『いいじゃないですか、そうしたら私が主人公のお話しが始まりますから』

「ソフィアに主人公の座乗っ取られる！？」

『覚悟しといてくださいね』

「頑張ろう！スツゴク頑張ろう！！」

『そういえば次から新章始まりますね』

「新章、か…」

『なんですか、桜花さん哀愁なんか漂わせて』

「私、暑いの大っ嫌いなんだよね、だから夏なんて消えればいいのに」

『まあまあ、とりあえず今回はここまで！これからもよろしく願います！！』

『ではまた、本編で！！』

「はあ…」

第11話

シヤリシヤリと歩くたびに沈む砂

見とおせぞ 先の見えぬ広大な大地に半ば呆れながら歩いていた

「だから 暑いつて！

何よこの高温！死ぬわ！！」

『まあ時期涼しくなりますって』

「あり得んわ 嘘つくな」

『本当ですって だって砂漠の夜は氷点下ほど寒くなりますのよ』

「……。」

私は言葉を失った。

『あつ！桜花さん、前！！』

「え？」

そう言つて、前を向いた瞬間、アリ地獄に落ちました。

「ぎああああ！！！！」

『きゃあああ！桜花さん！！』

「たすけて！下！下になんかいるうゝ！！！」

『ああ、これ、アリ地獄ですね、でもただのアリ地獄じゃないですね、人食い虫ですね。』

「平然と言っなあっ――！たすけろお――！！」

『え？なんか言いました？』

「すみません！たすけてください――！お願いします――！！」

『しょうがないですね』

そう言っソフィアはふわっととび私をひっぱりあげてくれた。

その時、私は思った「ああ、ソフィアってそーいや妖精だったな……」
と、ソフィアがすごい鬼畜だから忘れてた。

『桜花さん、今なんか失礼な事考えませんでした？』

「いえ、何も！お助け頂きありがとうございました――！！」

「（こいつ読心術でも使えんのかよ……）」

『……。まあいいです。次から気をつけてくださいね。』

「はあ……い。」

ソフィアの方からパキッ、ボキッ、という音が聞こえた。

「はい！次から気をつけます――！！」

『あたりまえです!!』

その後は特になにもなく（暑くて倒れるかと思ったけど）無事に夜になった。

「さつむ!」

『だから昼間言ったじゃないですか。夜は氷点下になりますよって』

「うゝ、ぶえつくしゅ!」

『きたなっ!』

「ひどっ!」

『とりあえず、テント立てましたからさつさと入ってください』

これでやっと暖かくなると思った私の期待はあっけなく散った。

「テントの中も中でさつむ!」

『まあ、布を鉄で支えてるだけですからね、しょうがないですよ』

「ソフィア~~~~なんとかしてえ~~~~凍え死ぬ〜」

『しょうがないですね、炎よ』

ソフィアがそう唱えた瞬間、近くにあったランプのようなストーブ

のような物に火がついた。

「あつたけー」

『良かったですね。あと、あしたにはピラミッドに着く予定ですから、なのであしたは朝が早いですからもう寝ましょう。』

「うん、ソフィア　ありがとう」

『どういたしたして。』

そして次の日私はまた暑さにうなされながら炎天下の下を歩いた。

「暑い」やら「もうつかれた」やら、どここう言っているうちになんとかピラミッドにたどり着けた。

「着いたあゝ！！！！！」

『とてもとても嬉しそうですね』

「そりゃあこの半端ない直射日光うけずにすむんだもん！」

『まあ、ピラミッドの中も中で暑いですけどね』

「え？嘘でしょう？」

『とりあえず、中に入りましょう』

そうして私達はピラミッドに足を踏み入れた

第12話

ピラミッドは上に登っていくものだと思っていたが、思いのほか、下に進むようになっていた。

いわゆる地下だ。

そして、私達はただひたすら地下を進んでいた

「たしかに暑くはない、暑くはないよ、けどさ、けどさ！蒸し暑いよ！しかも道のりなげえーよ！！蒸し暑いし道のり長いしですっげえイライラする、ソフィアなんとかして！！」

『そんな事言われましても私にはどうにも出来ませんし出来てもしませんよ。まあ、私は魔法で涼しいんですけどね』

「ひきよっ、ああーもう！なんでこんなに蒸し暑いんだよ！私は蒸しまんじゅうか！！」

『まあまあ、叫んだら余計に暑くなりますよ』

ガタッ

「あれ？今さっきなんか音なかった？」

『しましたね、なんでしょう？』

私達は辺りを見渡してみたがなにも異常が無かったためそのまま歩きだした。

ポンポン

「もー、何？ソフィア」

『え？私、何もしてませんよ？』

「え？でも今さっき私の肩叩いて…」

そう言いながら後ろを振り返るとそこにはにたりと笑ったミイラがいた。

「うわああああああつ！！」

『きゃああああああつ！！』

2人の叫び声は事前に打ち合わせでもしたのでは、というくらい見事に重なった

「逃げろーっつっ！！」

《さてー！》

ミイラは何か笛らしき物を取りだし吹いた。すると、大量のミイラや骸骨らがやってきた。

《侵入者を逃がすな！追えー！！》

私達はただただひたすら全力で逃げた。後ろから追いかけてくるミイラ達から

『桜花さん！！あそこの隙間に隠れましょう！』

「う、うん！」

私達は角をまがり、すぐさまその隙間に隠れた

《くそつ、何処に消えた！？皆のものの全力で探せ！！侵入者をにがすなあ！！！！》

バタバタ

『ふー、なんとかやり過ごせましたね、それにしても、何だったんでしょうね、今の』

「さあ、でも、何にしてももう会いたくないなあ……」

『そうですね』

《見つけたぞ、あそこだー！！！》

「うわぁーん！もう嫌だぁー！！！」

私は走りながら叫んだ

ざっ

目の前にミイラが現れた、左に逃げようとしたら左にもミイラが右を見たら骸骨が前後左右、ミイラ達に囲まれてしまった。

ジリジリと距離が縮まっていく

「どうしよう、ソフィア、なんかいい案ない？」

『こんな時こそ魔法です！』

「よし！バーンアウト！」

火の玉がミイラに向かってとんで行く

《シールド》

「なっ！？」

《魔封じ》

「よし！次こそ！バーンアウト！！」

パスッ

「ソフィア、でないよ！？どうして！？」

『くそっ、魔封じか、厄介だな……』

「ソフィア、魔封じってなに？」

『一時的に魔法を使えなくする魔法です』

「そんなっ！！じゃあどうするの！？」

『今の私達には手も足も出せません』

「そんなっ」

ミイラがこちらに縄を持ってやってきた。

「く、くるなああああーっつつ！！！！！」

私達は呆気なく捕まった

・。＊＋＊。・。・。＊＋＊。・。・。＊。・。＊
＋＊。・。・。＊＋＊。・

「お久しぶりです！桜花ですっ！！」

『ソフィアです』

「にしても、捕まったな」

『捕まりましたね、まさかあんな下等生物に魔封じが使えるなんて、
見くびってました』

「あの、ソ、ソフィアさん？」

『ああ、すいませんいいですか、桜花さん、次回絶対にあの下等生物
どもを足腰立たなくなるまでやっちゃってくださいあ、半殺しで
もいいですよ』

「ひいい」

『いいですか、絶対ですよ、まあ、桜花さんが殺らなくても私が殺るんですけどね』

「あああああ！！私は何も聞いていない！何も聞いていない！そう、私は何も聞いて無いんだ！はい、今回はここまで！（汗）」

『絶対に殺す…！』

「ひいひい」

第13話

《ここでおとなしくしているんだ》

ーどさっ

「あーあ誰かさんのせいで 捕まっちゃたじゃない」

『そういわれなくても』

「まったく 気味悪いぜ」

『それだけしか思っていない 貴方はある意味すごいですね』

「お互い様だぜ？」

『ふふっ』

周りには屍の山。頼りない蠟燭が辺りを照らしている薄暗い中で
いつ書かれたか解らないような浅黒い血でひび割れた？たすけて”
の文字

——耐えきれない者も居たのだろうか。縄で首を吊っているものも
見た。

まさに 地獄。

「しっかし よくもまあ、 私をこんな目に」

スクツと立ち上がると
決心したように呟いた。

「…この檻 破壊する」

「肉体強化部分指定『足』」

両手をパキパキと鳴らしてから左足を前にだし、そのまま右足で中心部を思いっきり勢いよく蹴った。

「d r e a k ! !」

ドカンッ

パラパラと欠片が落ちてくる中心部分にはぽっかりと大穴があいていた

《な、お前らどうやってこんな大穴を！？》

「逃げるぞ！！」

『はい！』

私達は全力で逃げたがしかし、

「…ってソッコで追いつかれた〜！こいつらどれだけ足速いんだ
よっ！」

『…転送！』

シュンッ

瞬間、私の周りはさっきと全く違う景気と化していた いや全くで

はない少し違ってくるだ。ピラミッドの中はだいたいおんなじ柄だ

「ええええっ」

「ソフィア！？これって転送魔法だよね！？」

「はい、そうですけど何か？」

「いやいやいや、何がそうですけど何か？、だ！！使えんならさつさと使えよ！！無駄な体力使ったじゃねーかよ！！」

「だって、転送魔法って疲れますしいゝ体力も使いますしいゝ」

「ま、そんな事は置いといて、楽譜探しに行きましょう」

「いや、流すなよ！謝れよ！！」

「五月蠅い！だまれ！つべこべ言わずさつさつについてこい！！」

「誰のせいでこんな事になったと思ってんだよ！！」

「さあ、誰ですかねえ」

「お前だよ！なんなんだよお前！！」

私達がいろいろと言いつついると、目の前には砂で綺麗に固められた鋼鉄のような扉があった

「この先から楽譜の気配がします」

「なんかこのパターンどっかで見たような…ってまさかこれも」

『勿論』

《ガキヤゴキヤダーン》

『強行突破ですが?』

「再びおみそれいたしました」

「それじゃあ、2個目の楽譜も頂戴いたしますか!」

第14話

「つて、…え？」

『あら？』

その扉の先にはあると思っていた楽譜はなく、もぬけのからだだった。

「なんか、このパターンもどつかで（涙）」

『いや、でも感じるんですよ、楽譜の気配を、必ずこの近くにあるはずです！探しましょう！！』

「えええええっ！また探すの〜！？」

『何か文句でも？』

「だって、竜宮城の時もあんなに走り回ったのに〜！？」

『あれは自業自得です。あなたが勝手に走りだしたんでしょう』

「うう、まあ、はい」

『でも、この近くにあるのは確かなんですから、頑張ってください』

「わかった、わかりました、やればいいんですよ」

『そうです、やればいいんです。』

「ちえ」

私達はその部屋の中を探し回った
もちろん、全力失踪でね！

「はあゝゝゝ、見つからないゝ疲れたゝ」

『桜花さんはいい加減学習能力を身につけたほづがいいですよ』

そんなことを言いながら壁にもたれ掛かった瞬間

カチッ

『「へ?」』

カパッ

私達が今さっきまで立っていた床は真つ二つに割れ、私達の身体は
結構速い速度で落ちていった

「うわああああつつゝゝ!」

『きゃああああつつゝゝ!』

「ソフィア! とりあえず地面にぶつかるまでに何とかしてえええええ
えゝゝ! ! ! ! !」

『ええ! ? ど、ど、ええ! ? 』

「と、とりあえず、なんかクッション的な物出してええー！！」

『わ、わかりましたあああ！！』

「早く早くっ！！もう地面があゝ！」

『ええっと、ご、極太ふかふかマット！』

「そんなんでいいの！？」

ボン！

その名のまま、極太のふかふかそうなマットが目の前に出現した。

ポフウンッ

「プハア、せ、セーフ」

『な、何とか間に合いました』

「落下中、マジで死ぬかと思った…」

『私もです』

「魔法って、本っ当に便利、魔法無かったら確実に私達死んでた」

『私も、普段何気無く魔法使ってたから忘れてましたけど、魔法って本当に、スゴク便利な物だったんですね』

「魔法に大・感・謝あぁー！！！」

『やめてください、うるさいですよみつともない』

「ごめんごめん」

『もう』

「とりあえずここから降りようぜ」

『そうですね、じゃ、飛び降りましょう』

「え！？これ消さないの？」

『はい、これは時間が経ったら消えます』

「ふん、じゃ、飛び降りるか」

「とうっ！」

見事着地！　と思いきや

「うわあ！」

滑ってバランスを崩し

ベシヤッ

転倒。

「いった」

『何してるんですか』

「しょうがないじゃん真っ暗で何にも見えないんだから」

『まあ、確かにそうですね』

そう、そこは真っ暗闇だった

一寸先は闇とはこのことだろう

「なあ、ソフィア？これでどうしろって言つのさ。降りた方がいいが闇一色で何も見えないじゃないの」

『シイツ！何が来るかわかりませんよ！！油断は禁物ですって』

「へえ〜そ〜なのかあ〜」

『炎よ！この忌まわしき娘を焼き払え！！』

「はあ！？ちよつと可笑しいだろ！！事実を述べただけじゃん。何なんだよ！」

『はあー、なんで女王様はこんな人をお選びになられたのでしょう。私にはわかりません』

「仕方ないでしょ。あんただって最初は　ここで会ったが何かの縁ってさんざん言ってたじゃない。」

『ほざくな。醜いぞ』

「え」

明らかに最初の頃と扱かわれ方が違う気がする。
これはひどいわ

何て言ってる間が？油断”な訳で。

《ブオオオオオ！！》

瞬時に砂嵐が巻き上がり、自分たち目掛けて飛んできた。

「『変なの来たー』』

危機一髪すれすれで避けてああ、私なんか格好良くなー！？なんて思
いながらソフィアに目配せした。

ソフィアは私の心をよんだのか変な人を見るような目でこっちを見
ていた

私はそれを見なかった事にしてその変な物体？の方に向きかえった

「ええと、取り敢えずどちら様ですか？」

《オマエラ ジャマ ケス》

「はあ、やっぱりな」

第15話

「はあぁっ、めんどいから余計な戦いは避けようと思ってたのに。ダルいったらありやしないわ」

『グルワアアッ!』

地響きのあと、いきなり地面がひび割れた。

それを軽々しく飛んで避けるとチツと舌打ちしてから宙に浮かんだ

「どこぞのポ。モンみたいな鳴き声ね…」

『まあ、いいからとつとやっつけてくださいよ』

「楽譜の為なら何でも有りなのかよ」

『前にも言いましたけど、私的には楽譜と私自身が無事だったら後はどうでもいいですから』

「あいかわらず鬼畜だね」

『なんとでも』

《邪魔者 ケス》

鉄の釘があちこち空中から私に向かってきた

「まあ、意外と、」

ガシャガシャン！！

「私一人で十分かもね」

キシャンッ！

私は炎を纏った刃で空中をきった。

『なかなかですね…。鉄釘を炎の刃で全て叩き斬るなんて。綺麗でしたよ』

「本当ならドヤ顔のひとつでもするんだがな。まあ、前より上手くなったかも」

あと武器ぐらいなら無暗唱もいけるな。私ってば才能があるわあつて心を騙さないとやっていけないくらい、危険なことなのはなからわかっていた事だが。

「こつちからもいくけど？まあ、そつちから仕掛けてきたんだし。」

命乞いなんて無しだよ？

そうやって笑った顔はきつと恐ろしかったに違いない。

あ、格好つけました。すみません。

そうして私は勢いよくそいつに斬りかかった

けど

ガキンッ

「斬れない!？」

《オマエラ ジャマ ケス》

『桜花さん、斬れないのなら諦めましょう、呪文です!使えるでしょう?』

「わかった!」

「ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の主にして再生の火我が手に宿りて敵を喰らえ紅き炎『紅蓮炎』」

私がそう唱えた瞬間、真つ赤に燃え盛る炎が相手にめがけて飛んで行った

ジュウウ

相手の鎧らしきものが少し溶けた

『この調子です、頑張ってください!』

「よっしゃあ!」

再び呪文を唱える

「見るもの全てを魅了する紅き焰偽りを灰とかせ『真炎華』」

そう唱えた瞬間大きな花びらのような炎が相手に容赦なく降りかかる鎧が音をたてて少しずつ溶けていく

「よっしゃ！次の呪文を…」

『桜花さん後ろつつ！！！！！』

「えっ？」

ソフィアの切羽詰まった声が聞こえ、振り向いた時にはもう遅かった

相手が唱えただろう呪文で発動されたゴウゴウと燃え盛る火の玉が私のすぐ近くに迫っていた

動くことすらできなかった

その時私は死を覚悟した

・。＊†＊。・。・。＊†＊。・。
†＊。・。・。＊†＊。・。・。＊

「皆さんお久しぶりです！桜花です！」

『ソフィアです！』

「ねえ、ソフィア」

『なんですか？』

「私さ、本編で死にそうだけど大丈夫かな？」

『大丈夫なんじゃないですか？』

「なんでそういいきれなの」

『だって、桜花さんはい・ち・お・う！主人公なんですから』

「私がこんなに焦ってるのになんてやつ…でもまあ確かに私主人公だから死にはしないよね」

『死にはしなくても大怪我はするかもしれませんがねー』

「ぐっ、…ま、まあなんとかなるよ！……きつと」

「そうだ！ソフィア、たすけ…」

『いやです』

「せめて最後まで言わせて……！」

『いやです、私は桜花さんに私に話しかける権利を与えた覚えはありません』

「えー、いーじゃん！」

『だめです』

「いーじゃん！！」

『うるさいです、少し黙っててください　でもまあそんなに大声だす元気があるなら本編、大丈夫ですよ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5407x/>

～楽譜～私の異世界探検ライフ

2012年1月4日15時45分発行